

論文 (Article)

# ライフコース選択へのキャリアモデル インタビューの有効性

The effectiveness of the carrier model interview for  
life course choice

室 雅子  
Masako Muro\*

キーワード：キャリア教育、キャリアモデル、ロールモデル、インタビュー、女性の  
ライフコース

Key words : carrier education, carrier model, role model, interview, women's life course

## 1. はじめに

### 1-(1) 研究の背景

近年キャリア教育が大学にて行われるようになり、最近では各学校種における実践報告例も数多くみられるようになっている。いわゆる就職活動に直結するような自分探しやスキル取得などの就職準備教育や現状調査の報告以外にも、大学生を対象として考えた「キャリア教育」で育てたい力や思考の提案や実践報告を通じた学生の意識変化について追究した報告等もなされている。これらを見渡すと、小、中、高、大の子どもたちの成長段階ごとに目的や方法が異なるのは当然であるが、さらにどのような職業志向を持つ学生の集まり（＝学部）であるか、また、生涯教育や生涯設計をも視野に入れた場合、性別においても必要とされるキャリア教育が異なることが見えてきている。先行研究の一部として次のような例がある。

#### ①性別によるキャリア教育

性別によるキャリア教育の違い、とくに女子学生へキャリア教育に必要な事項を提言した例として、合谷(2009)<sup>1</sup>は平成18,19年度に採択された現代GPの内容分析から、採択されたキャリア教育プログラムでは、「キャリアモデルの提示による将来像の明確化」、「男性とは違う女性のライフコースの多様化や女性に関わる労働環境等を踏まえたキャリア教育」、「ジェンダーセンシティブなキャリア教育」等が行われていることを指摘している。さらにキャリア教育の必要事項としては、「女性が働くことに関するしっかりとした心構えや覚悟の形成を図ること、および職業に関する具体的な『イメージ力』を高めること」の2点をあげ、「イメージ力」を高めるために「どのようなキャリアモデルが存在するのか具体的な事例を提示する」よう述べている。（下線筆者）

## ②実務を伴うキャリア教育の効果

それでは、具体的な事例として実際に現場体験をするのがよいのか。松村(2009)<sup>2</sup>は、教育委員会の教員養成事業、すなわち教員養成塾における活動のキャリア形成としての学生への影響について、教員養成塾のような実践的な教育が、学生の教育実践力や視野の広がり、人的ネットワーク形成、実践力獲得への意欲などの成長を促すことを指摘している。だが、一方で塾参加決定時点での教職への心構えが出来ている学生には有効であるが、教職への迷いがある者が参加をするとかえって教職への自信を失う可能性もあることも述べている。

同じく、中村(2009)<sup>3</sup>は幼稚園教員と保育士養成の専門学校生を対象にインタビュー調査を実施し、キャリア教育の効果を調べた結果、中学で「職場体験」をしていてもそのまま将来の職業に結びついているわけではないこと、幼稚園や保育園での職場体験を体験した学生でも「子どもと遊ぶこと」を期待して入学した者がいること(＝職場の本当の姿がわかっていない)を明らかにしている。

つまり、具体的な事例として現場に触れれば良いというわけではなく、その前に“生き方”や“心構え”ができていなければ効果がないことを示唆していると言えよう。

また、中村(2009)<sup>3</sup>は同論文のなかで、養成校の学生は必ずしも「『子どもが好き』で将来『保育士』や『幼稚園教員』になりたい学生ばかりではない」ことを指摘し、実習で実態を知り進路変更を考える者がいることも報告している。一見、教員養成校・養成学部において教職以外を志向する学生が出ることはマイナス効果のようであるが、学生本人にとっては、自分の向き不向きを知り転換するきっかけを得たという意味で、大切なキャリア教育の成果であると考えられる。

## ③進路決定の影響を受けやすい人・モノ

影響を受けやすい人物については、木之下(2010)<sup>4</sup>が女子青年のロールモデル形成について、男子は実存で自分と少し離れた人物(有名人、歴史上の人物)を挙げるのに対し、女子は身近な人物が多く挙げられ、この「身近な人物」に対しては内面的理由が挙げられやすいことを指摘している。ゆえに身近もしくは親近感を持てるロールモデルに接し、キャリアや人生の役割遂行の現状などの情報を得ることは、将来像を描いたり、意欲や意思の向上に役立ったりすると推測される。

釧路・高橋(2009)<sup>5</sup>は、女子大学の人間社会学部という多種業種に就職希望を示す学部の学生に対して調査した結果、進路目標決定には企業側が提供する情報や企画からの影響を受けやすいことを報告している。しかしこの結果は、一般企業ならば時期が来れば各会社の事業内容や業界に関する積極的な情報提供が行われ、それに基づき自己決定が行われるが、前述のような教職などはあえて「教員」という「職業内容」自体に対する説明会はあまりないと推測され、教育実習等直接現場に参加する実習を行うまでは学生の体験や教師イメージが決定要因となっていることが想像される。このような、一見職業の様子がわかっているような業種にも、あえて職業の実状や業務内容といった情報を就職の視点から知る機会が必要ではないかと考えられる。

## 1-(2) 目的

そこで、本研究では対象学生を、広く一般的な多種多様の就職先が考えられる学部ではなく、入学前から特定の資格（教員・保育士）や将来の職業を具体的に決めている者が多いと考えられる「教育学部」の学生に設定し、様々な職種に進む可能性のある学部でのキャリア教育とは異なるキャリア教育、つまり志望職種が決まっている者に適したキャリア教育の必要性和その必要事項、また志望職種の先輩（＝キャリアモデル）へのインタビューを通じて学生の職業観にどのような変化や効果をみられるか、有効性を明らかにすることを目的とした。

また、共学校では男女共同のキャリア教育となると考えられるが、女子大学では対象が女子だけであり、ゆえに女性としての自立や女性としての生き方をも考えさせ、それを踏まえた生涯設計の必要性を考えさせることができると思われる。キャリア教育としてだけではなく、女性教育としての側面も本研究の特徴とし、女性としての生き方の先輩（＝ロールモデル）の生き方に触れることによる、女性としての人生観（役割観も含む）の変化や効果を明らかにすることも目的とした。

なお、インタビュー調査を主ワークとして実施するが、インタビュー調査の効果については次のような研究がある。平尾（2005）<sup>6</sup>はキャリア教育の課題としてキャリアインタビューを人生の先輩として親などへ学生に課した結果、3人に1人は考え方に変化があったと報告している。田中（2009）<sup>7</sup>は、教師教育における「聞き書き」（インタビュー活動）の成果として、「具体的な労働現場の実態やそこで働く人々の思いに接する学習」であり、「社会的な地位や収入だけで価値判断する皮相な職業観から抜け出し、働くことの喜びを伝えられる教師となってくれと期待される」ことを第一の効果としてあげている。これらの成果からも、本研究の手法として妥当であると考えられる。

## 2. 実施方法、実施対象、実施時期

今回、入学後1年が経ち、大学にも慣れて少し将来についても考え始めたと思われる2年生を対象に、学習前に持っている学生の職業観や将来設計を把握した上で、希望職種のキャリアモデルにインタビューをするというワークを通じて、職業観・希望職種のイメージ・現状等への考え方に変化を生じさせることを試みた。

これらの活動を通じて、学生には女性が主体的に職業を持って（意思をもって“専業主婦を選択”することも含む）生きる「女性としての生き方」を考えられるようになるために学生が気づく必要のある事項や、職業を見据えた学生生活での課題を認識できるようになることを期待した。

### 2-(1) 方法

本研究の実査（ワーク）は、次の10段階で展開した。

- 1). 自分の将来設計を行う。自己の将来像の把握（事前状態での自己把握）

- 2). インタビュー対象者決定（キャリアモデル・ロールモデルである女性）
- 3). インタビュー共通項目（質問事項）を参加者全員で決める
- 4). インタビューの実施
- 5). インタビュー結果のまとめとレジュメの作成（統一フォーマット）
- 6). 発表（聴衆者は内容と発表の仕方の批評をする）
- 7). 仲間の発表による情報の共有（と批評）＋毎回（3人発表）の感想記入
- 8). プレゼンテーション能力の反省と気づき（他者からの批評を受けて）
- 9). 希望職や職業について再考（自己調査および他者発表を聞いての再考）
- 10). （職業のみならず）女性としての生涯、生き方についての総括

## 2-(2) 対象

本研究対象者（＝インタビュー・調査実施者）は、椋山女学園大学教育学部2年生27名である。

## 2-(3) 時期

キャリア・ロールモデルインタビューの準備期間は2010年9月～10月中旬、実施は同年10月～12月、インタビュー結果の発表は、同年10月下旬～1月中旬、総合的なまとめレポート作成（自己分析）は1月中旬～下旬に行った。

# 3. 結果

以下、2-(1)方法の1)～10)の展開に沿い、実施の具体的な方法と学生に見られた効果について述べる。

## 1) 自分の将来設計、イメージの把握（事前状態での自己把握）

具体的なキャリア・ロールモデルに話を聞いて影響を受ける前に、「自分が大学を卒業してから亡くなるまで」の自分の“希望する“将来を想像し、どのような一生を送るかについて、起こりうると思われるライフイベント、そのときの年齢、そのために問題になること選択すること、そのための解決策、を時系列で書いてもらった（＝ライフデザイン）。このようなワークを他授業でも実施することがあるが、その際にも卒業してすぐや若い世代の内容は記述できるが、中年期、高齢期などになると空欄が目立ち、最後に「死亡」とだけ書かれ、中年～高齢期の具体的な記述・想像ができないという傾向が見られる。しかし、メインワークであるインタビューで、女性としての生き方や母としての生き方についても対象者に質問させ、自分の描いた将来像との違いや課題に気づかせたかったため、対象者のターゲットである中年期における自己を想像しておくことは必須であった。ゆえに記入時に、自分の「親」世代が今直面している課題は何か、自分が生まれてから今日までの出来事は親の何歳の時でどうしてきたか、などから推察させ置き換えて考えるように促した。また、資料として、「家庭周期段階別にみた基本的発達課題」の一覧を配布し、ライフステージごとに様々なライフイベントや課題があることを提示することによってイメージの形成を促した。

## 2) インタビュー対象者決定 (キャリアモデル・ロールモデル)

メインワークとしてインタビューに行き、発表を行ってもらうこと学生に告げ、インタビューの対象者を自分 (= 学生本人) の希望する職業に就いている人、できるだけある程度長い就業期間がある人 (= 若くない人) とした。キャリアモデルでもあり、ロールモデルでもあるように「女性」をインタビューの対象者とするように限定した。身近に自分の希望する職業に就いている対象者がいない者、同業種だが専門が異なる者などもいたため、その学生には、小学校教諭希望ならば中学校や高等学校、大学の教員でも可とし、また、教科も違って良いことにした。その結果、本人の希望職種とインタビュー対象者の関係は表 1 のように選定された。

表 1. インタビュアーの希望職業と対象者の職業一覧

\*二重線は発表日の区切りを示す

インタビュー対象者の職業 (年齢)	学生本人の希望している職業
小学校教諭 (51)	中学校教諭 (数)、小学校教諭、高校教諭 (数)
大学教員 (51)	小学校教諭
小学校教諭 (48)	小学校教諭か音楽教育関連
ピアノ講師、小学校教諭 (45)	小学校教諭、小中の事務
幼稚園園長 (59)	幼稚園教諭、小学校教諭
元小学校教諭 (88)、小学校教諭 (57)、 高等学校教諭 (英) (50)	小学校教諭、司書教諭、眼鏡士
元 幼稚園教諭 (53)	幼稚園教諭
小学校教諭 (52)	小学校教諭
エステティシャン (48)	エステティシャンを含む美容系、小学校教諭
小学校教諭 (49)	小学校教諭
銀行員、建設会社事務員 (49)	公務員
会社員、塾の教師の教育・企画 (51)	中学校教諭、高等学校教諭
中学校教諭、高等学校教諭 (数学) (43)	中学校教諭、高等学校教諭 (数学)
高等学校教諭 (英) (42)	小学校教諭
小学校教諭 (48)	小学校教諭
エレクトーン講師 (40 代)	エレクトーン講師、教員
専業主婦 (元タイピスト) (85)	専業主婦、ブライダル関連、会社員
小学校教諭 (48)	小学校教諭、ピアノ講師
高等学校教諭 (数) (44)	高等学校教諭 (数)
小学校教諭と中学校教諭 (47)	小学校教諭
小学校常勤講師・非常勤講師 (50)	小学校教諭、幼稚園教諭
高等学校教諭 (英) (46)、看護師 (45)	小学校教諭
養護学校教諭 (44)	小学校教諭
専業主婦 (55)	専業主婦
専業主婦 (50)	専業主婦
小学校教諭 (50)	小学校教諭
税理士補佐 (45)	専業主婦

表 1 にあるように、必ずしも希望の職業と対象者の職業は一致していないが、専業主婦以外は基本的に教える職業や会社員など、類似の職種の対象者となっている。

しかし、この多様な職種選定が、結果的には教育学部という教員志望の多い学生達の持つ「狭い職業観」への気づきと広い「将来への可能性」への気づきという好効果を生んだ。

### 3) インタビュー共通項目（質問事項）の決定

今回、他学生の調査結果の報告からも、職業や女性の生き方について学ばせる意図や同業でも個人々人の人生や対応、背景が異なるため、職業は同じでも決して皆同じではないことに気づかせる意図から、全員のインタビュー内容を比較できるよう、共通の項目を設定した。また、インタビュー自体に意欲的に取り組み、自分の興味のある観点を知り、かつ他の学生の報告からも学べるよう、参加者全員から聞きたい質問項目を出し合い設定した。表2の一覧が設定（報告）項目である。これ以外にインタビューでは本人が興味のあることを加えて質問してよいこと、また話の流れ上聞きづらい項目は省いてよいことにした。

表2. 質問（報告）事項一覧

- |                                       |
|---------------------------------------|
| 1. 基本的属性（性別、年齢、職業、家族構成、居住地、資格・免許）     |
| 2. なぜその職業に就こうと思ったのか                   |
| 3. 今の職業はなりたい職業だったか                    |
| 4. いつからその職業を目指したか                     |
| 5. その職業に就くために努力したこと                   |
| 6. その職業に就くのにになにか体験しておいた方がよいこと         |
| 7. その職業についてよかったこと、大変だったこと             |
| 8. その職業を辞めようと思ったことはあるか                |
| 9. 何歳まで続けたいか、それはなぜか                   |
| 10. なりたいと思っていた職業の仕事内容と、なってからの現実とどう違うか |
| 11. 退職後にやりたいこと                        |
| 12. 仕事以外にも何かやっていることがあるか               |
| 13. 自分の時間は取れているか                      |
| 14. 勤務時間外にどれくらい仕事をしているか               |
| 15. 休日の日数と、休日に何をしているか                 |
| 16. 一日の仕事の流れ（仕事の流れとその時間）              |
| 17. その職業に就いて自分が変わったこと                 |
| 18. 家事と仕事の両立について                      |
| 19. 育児と仕事の両立について                      |
| 20. 産休・育休の期間と、取った様子、育休があけた後の様子        |
| 21. 職業に就いた後、自分の向上のために何かしていることがあるか     |
| 22. 職場の人間関係はどうか（どうだったか）               |
| 23. 職場のジェンダーバイアスを感じる時があるか、それはどのようなときか |
| 24. 給料または初任給（聞くことができたなら）              |

ここで学生によって挙げられた項目について触れておきたい。表2の1にある「基本的属性」や、16の「一日の流れ」、18,19の「家事・育児と仕事の両立」、23の「ジェンダーバイアス」など、こちらが意図して加えたものもあるが、ほとんどは学生から自由に聞きたいことをあげてもらい、板書によって書き出し、同じものをグループ化整理した結果である。このことから、女子大学生が就職や将来を考える際に、「職業そのものへの意識と実態」、「就職への準備事項」、「継続への意識と努力」、「仕事以

外の時間や背景とのバランス」、「人生のバランス」、「産休・育休について」、「給料」などが関心事であり、言い換えれば“なりたい職業なのに実状を知らないため欲している情報”であることが明らかとなった。

#### 4) インタビュー調査の実施

2)、3) をふまえ、発表の日時(10月下旬～1月上旬の中で1回)だけ決め、個々でインタビューを実施した。インタビュー調査を行うことが初めてであった者も少なく、事前には難色を示した者もいたが、事後感想では「本人から聞く」ということによってより女性の生き方や職業に興味が湧いたり、普段から接する機会の多い人を対象者に選んだ者は接し方が変わり純粋に尊敬できるようになった、という声も聞かれたりした。対象者に「早く先生になってね、楽しみにしているから!」と直接喚起され、モチベーションが上がった者もいた。

#### 5) 調査のまとめとレジュメの作成

4)で行った調査を質問項目→回答、の順に各自でまとめ、体裁を統一したレジュメとして発表時に用意させた。(A3、枚数自由、記載内容は対象者、質問と答え、今回のインタビューを実施した感想) 体裁が統一していることから、情報の比較を容易に行うことが出来た。

#### 6) 発表 (聴衆者は批評をする)

5)で準備したレジュメを使い、聴衆者かつ情報共有による共同学習者である26名の仲間に向け、わかりやすく、適切な補足をしながら説明するように指示をした。今回は教職希望である者が多かったため、教員の場合は主な仕事内容等の説明は求めず、一日の行動を解説することで代わりとした。ただし、別職の場合は、仕事内容や必要な資格など、業務の概要を説明するように求めた。

一人の持ち時間は20～25分(質疑応答を含む)とし、1回の授業(90分)の中で3人発表を行い、発表後に感想・批評用紙記入の時間を取った。

形式的な発表で終わらせないように、聴衆者である学生には、些細な質問でも気になることは積極的に質問するよう促した。結果、レジュメや発表では伝えきれなかったがインタビューでは得ていた情報などが補足で説明されたり、自分が将来を考えるために必要質問がされたり、報告された事実(経験)がなぜその人生選択だったのかという深層まで追究されたりした。

#### 7) 仲間の発表による情報の共有と批評、および毎回の感想記入

表1にあるように、仲間の発表によって様々な“教える”職種について聴くことで、学生自身が調べた職業以外の職業の大変さ、良さ、職業の内容(1日の流れ)、家事との両立、職場の雰囲気などを共有学習した。

例えば同じ「教諭」であっても、積極的にその職業になりたかった人ばかりではなく、成り行きでなった人や働くうちに段々喜びを感じていった人がいたり、「教員=子どもが好きな人」というイメージを持った学生が多かったが、実際は子どもが好きでない支援者や職業に就いてから子どもが好きになっていった支援者もいたりした。一職

種一対象一発表でなかったために同職種での比較がされ、職業に持っていた固定イメージや、「(この職は) こうあらねばならない」という縛り、ある職業につく人はみな同じ傾向を持つ人だ、という誤解を崩す効果を生んだ。また、会社員や専門職などの発表もあり、教員以外の仕事について知ることにより、改めて教員という仕事に良さを見つける者、他の道があることに気づく者、どの職種にも誇りと苦労があることに気づく者がみられた。全回を終えてからまとめて感想を書かせると最初の頃の発表の印象が薄れ、直近の発表の感想に偏ることが経験上分かっていたため、毎回3人(2人)の発表を聴き、考えたことを毎時単位で記入させた。自分の職業観や聴いた職業について考える機会を何度も作ったことになる。その結果、毎回3つの職業や3人の対象者を比較した感想が多くみられた。特に、小学校教諭について2人が発表した回や、小・高の教諭の発表があった回、正規採用と常勤・非常勤採用の発表があった回など、「教諭」といっても様々な形態があることに気づく回が何度もあり、学生自身の職業観のゆれや考えの広がりが見られた。さらに、回数を重ねると以前回の情報と比較していた者もいた。

#### 8) プレゼンテーション能力の反省と気づき(他者からの批評を受けて)

発表を聴く際に、毎回「コメント用紙」(A4)を配布し、批評を記入させた。批評観点は、「良かったところ」、「改善するとよいところ」(発表内容、発表の方法・仕方など)である。用紙は記入後発表者に渡し、発表者は別の「まとめ用紙」に参加者からもらったコメントをまとめながら書き写す作業と自己反省を記入する。自分の良さと改善点を認識し、全体の感想でワークを総括し、発表の技法に関する課題も自己学習をする仕組みである。本論文では、この能力については言及しないが、教員になる者にとって相手の成長を思いながら批評する訓練は、発表技法の工夫と共にキャリア教育として非常に有効であった。

#### 9) 希望職や職業について再考(自己調査および他者発表を聞いての再考)と10)

##### 女性としての生涯、生き方についての総括

すべての発表を終了後、「インタビューまとめ」というプリントによって、自由記述形式で考えの変化を自己認識できる内容の調査を実施した。質問項目は次の通り。

##### 【まとめプリントの質問項目】

- ・今回調べた職業とあなたのなりたい職業
- ・調べた職業について意外に思ったメリット・デメリット
- ・希望の職種について考えが変わったこと
- ・職業と母親業・妻業の両立について
- ・職業と周囲の環境(人を含む)について
- ・職業を継続するために必要なサポートについて(家族・地域・行政)
- ・大学中に準備したい・見つめ直したいこと
- ・「職に就く」ということについて
- ・職業を「選択する」ということについて



- ・女性としての自分の将来について
- ・他に調べてみたい職業
- ・総括感想

#### 4. 効果

このワークにより、学生達が気づいた事項は大きく次のようにまとめられる。

##### 4-(1) 職業イメージの思い込み（必要条件、職内容）

「子ども達と楽しく接していることが全てだと思っていた」「子どもが好きじゃないと（教員に）なってはいけないと思っていたが、子どもは好きになるものだ聞いて、今は苦手でもいいんだと思った」「やめたいと思う、子どもが嫌い、などでもよいとわかった」というように、教員はこうでなければならない、というイメージに縛られていた学生が多いことが明らかとなった。教員という仕事が普段から児童・生徒・学生として見ていた職業であるが故にイメージが固定化しており、そのイメージと自分の違いに悩んでいたようだ。また、授業以外にも出張やデスクワークがあることや、保護者との関わりや同業者、地域の方とも触れあいが必要であることなど、基本的な職業の実態を知らなかったり、全ての人が自信を持って仕事に臨んでいるわけではなく悩んでいる人も少なくないことに驚いている記述もあったりなど、予想以上に教師像はイメージのみであり、教育学部で教員を目指す学生でさえも実際の仕事内容や一日の流れ、メリット・デメリットを知る機会も知識もないことが明らかとなった。

デメリットや予想外の仕事内容、大変なこと辛いことの情報を与えるのはマイナスに思われがちだが、実際は「『やりがい』を聞いたことにより今まで以上に教師になりたいと思った」などの感想を書いており、職業のもつ辛い部分も正確に情報として提供することは、むしろ「それでもなりたいか」という自己への問いかけとなり、意思決定に重要な項目であるとわかった。

教員イメージだけでなく専業主婦にも固定的なイメージがあったようで、「各職業に勝手な先入観を持って見ていて、(その職業の)良さや大変さに気づいていなかった」として各職業に対し敬意をみせた記述も見られた。

##### 4-(2) 周囲の人と仕事の継続との関わり、仕事と家庭の両立について

出産後も仕事は継続すると考えている者は多くても、実際にどうやって暮らして行くかまでは考えて居らず、結婚・出産・子育て、介護等を経験した方々がどのようにして現在まで乗り切ってきたかの具体的なモデルを聞いたことにより「周囲の人との協力」の必要性や、「周囲の人の力を借りること」の大切さに気づいた学生が多かった。

また、この調査により教員の仕事継続の背景には近居の親の協力が重要であることも明らかとなった。27 対象者のうち、出産を機に仕事を辞めた方、専業主婦の計 6 名を除いた 21 対象者において、実父母または義父母の家事・育児の助けがあったから仕事を継続できたと回答した対象者が 12 名であった。父母の直接的な協力は得ら

れなかった人（4名）、もしくは逆に介護をしている人（1名）、話題として挙げられなかった不明者（3名）においても、仕事を持つことに於いて、家族の理解と協力は不可欠であると述べている。

また、仕事の継続から発展し、女性が仕事を続けていくことが男性よりも大変である社会であること、80代の方の苦勞を聞いたことにより昔よりも女性が働きやすい社会になっていること、教職自体にはジェンダーバイアスを感じているとの回答は少なかったが昇進などの場合はバイアスが存在する例もあること、男性もジェンダーバイアスを感じている例があることなどの報告を聞いたことで参加学生のほとんどが社会の仕組みに目が行き、「真の男女平等とは」と考える学生も見られた。事前に聞き取りをしたところ、ジェンダー関連の授業は受けても実感として受けとめられていない学生が多く見られていたが、本調査後は自ら課題としてジェンダーや社会の仕組み、女性としての労働について考え始めたことは大きい効果があったと言える。

#### 4-(3) 自分の考えの狭さ、就職の本当の意味、に気づく

「就職のことだけ考えていた自分が、就職後（生き方）を考えるようになった」「教員になることばかりを考えていた自分に気がついた」「同じ学部の学生でもいろいろな将来像をもって異なっていることに気づいた」という感想に代表されるように、自分が狭い考えでいること、様々な考え方や道があることに気づかずに考える選択肢さえも持たずにきたことを認識した者も複数いた。資格取得系の養成学部では、どうしても合格＝就職が目標となりがちであるが、本当の人生はその後が重要である。

「『職業に就く』ということは経済的な面が一番の理由だと思っていたが、自分のこれからの人生をどう生きたいのかという“やりがい”や“誇り”を持つことが本当の意味だと考えた」「自分の意思や信念が大切だと思った」というように、職に就くということ自体を自然と考えられるようになったのは、“やりがい”や“誇り”をもった現職の方の話を聞いた効果であるようだ。これこそキャリア教育の目指したい主テーマの一つではないだろうか。

#### 4-(4) 適切な情報提供による自己決定

「小中高の教師の報告を聞いたことによって、（比較して）自分の行きたい学校種が絞れた」という意見に見られるように、教員という仕事自体の情報も不足しているが、その後の選択肢である「どの学校種が自分に合っているか」という選択が、それぞれの職業内容が適切に伝えられていないために曖昧になっていたことがわかる。実際に実習に行けばわかるかもしれないが、実習に出ない学校種は推測するしかない。インタビューを個々にさせるのが難しくても、せめて講演の形ででもよいので、現職の職業の具体的な内容とメリット・デメリットを知る機会が必要であろう。

#### 4-(5) 直接話をきく『インタビュー』の効果

前述したが、直接対象者から期待の声をかけられたことにより、今後の勉強や就職へのモチベーションが上がった者や、直接インタビューした声の報告を聞いたからこその他の職業にも興味を持ったという者がいた。これは、授業などで「伝聞」する教

師像ではなく、「今、そこで行われている仕事」と「身近に感じるモデルからの激励」に接した効果であると考えられる。これは先行研究にてキャリア教育に必要な事項として述べられていた事項に合致する。木之下のロールモデル形成に身近な人物からの内面的な影響、合谷の挙げていた「キャリアモデルの提示、女性のライフコース、女性労働環境等、ジェンダーセンシティブな教育、心構えや覚悟の形成、具体的な『イメージ力』の向上と具体的な事例提示」の各項目が、今回のワークでは質問項目と情報提供として結果的に網羅されていることが挙げられる。ゆえに、今回のインタビューによるキャリア教育は、期待される能力の育成が期待できる有効な方法であると言える。

## 5. まとめ

本研究では、教育学部というある程度の希望職種を具体的に決めている者が多い学部におけるキャリア教育と、女性としてのロールモデルの生き方に対して、キャリアモデル兼ロールモデルへのインタビューを通じてどのように学生の職業観やイメージ、現状等への考え方に変化を生じさせられるかについて行った。結果として、キャリア・ロールモデルへのインタビューは、職業イメージの縛りや誤解からの解放、自分の女性としての生き方の将来イメージ作りや、女性としてこの社会で職業を持って生きることへの意識と努力、周囲の協力を気づかせることに大変効果があることが明らかとなった。

今後の課題として、非教員養成学部の教職課程履修者での効果（教員が選択肢の一つである、免許が専科である）場合をも同様の効果が見られるかを追究していきたい。本研究で使用したデータは、平成 22 年度椋山女学園大学学園研究費（A）の助成を得て、女性リーダー育成の DUEL プログラムの一環として実施したものである。

### ■引用文献

1. 合谷美江「女子学生に焦点をあてたキャリア教育の必要性について」、国際経営論集 38, 175-188, 神奈川大学, 2009
2. 松村千鶴「学生の教員としてのキャリア形成における大学の役割—教育委員会の教員養成事業との関係に着目して—」、現代学校研究論集 27, 36-46, 京都教育大学公教育経営研究会, 2009
3. 中村三緒子「キャリア教育の効果」、日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 15, 213-224, 日本女子大学, 2009
4. 木之下祐子「女子青年のロールモデル形成」、早稲田大学教育学会紀要, 11, 31-38, 2010
5. 釧地邦秀・高橋意智郎「大学生の進路目標決定とその影響要因に関する研究：実践女子大学人間社会学部のキャリア教育に向けて」、実践女子大学人間社会学部紀要第 5 集, 45-65, 実践女子大学, 2009
6. 平尾元彦「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」、大学教育第 2 号, 85-89, 山口大学教育機構, 2005

7. 田中宏幸「教師教育における『聞き書き』活動の意義と方法－教員養成課程における指導事例の検討－」, 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第58号, 73-81, 広島大学大学院教育学研究科, 2009

---

■参考文献

- 渡辺三枝子「女性キャリア形成支援のあり方－『ロールモデルに関する調査研究』の結果から－」, 国立女性教育会館ジャーナル vol.13, March, 2009
- 平尾元彦「キャリア教育の手法としての個別学習課題」, 大学教育第3号, 145-160, 山口大学大学教育機構, 2006
- 平尾元彦「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」, 大学教育第2号, 95-104, 山口大学大学教育機構, 2005
- 齋藤美保子・岡村貴子・上野顕子・牧野カツコ「生活設計教育における『人生すごろく』作りの意義（第一報）, （第二報）－中・高校生ライブイベントに対する意識－」, 日本家庭科教育学会誌第42巻第3号, 1-8, 9-16, 日本家庭科教育学会, 1999